

『たのしい川べ』とゴダイゴ

経営学部
安藤 聡

伝説のロックバンド、ゴダイゴが結成30周年を迎えた。ゴダイゴといえば「ガンダーラ」、「モンキー・マジック」、「ビューティフル・ネーム」あるいは「銀河鉄道999」などの一連のヒット曲で70年代末期に一世を風靡したが、実は一方で良質な映画音楽やCM音楽を数多く制作したことも知られている。中上健二の小説『蛇淫』を長谷川和彦が映画化した『青春の殺人者』（1976）や大林宣彦の処女作『ハウス』（1977）の音楽はゴダイゴであった。動物ドキュメンタリー映画『キタキツネ物語』もそうだ。CM音楽の方でもトヨタの「スプリンター・リフトバック」やホンダの「プレリウド」や三菱の「ミラージュ」、サントリーのビールやデルモンテのトマトジュース、森永の「小枝」と「ピーチネクター」、明治製菓のホワイトチョコレート「リリック」、アヲハタのマーメイド、ブラザーのタイプライター、NECのオーディオ機器（というのが昔あった）、ビッグ・ジョンのジーンズ、武田製薬の「ベンザエース」、カネボウ化粧品や味の素など、70年代後半にすでに物心がついていた人なら必ず記憶のどこかに残っているであろうキャッチーなCMソングをいくつも手がけ、CM曲だけを集めたアルバムも二枚出ている。日立の「この木何の木」は長寿CMとして有名だが、これの前の日立グループのイメージ・ソングはゴダイゴの「What Did You Do for Tomorrow」であった。ゴダイゴはビートルズの影響を強く受けていて、ほとんどの曲の歌

詞が英語である。（英国でもアルバムが3枚くらい発売されていて、BBCのヒットチャートでもベスト50入りしたことがあった。）「ガンダーラ」や「ビューティフル・ネーム」なども英語版が最初にあり、後から日本語版がシングル用に録音し直されている。これらの曲もサビは英語のままであり、それだけでも当時としては画期的だったし、私が英語に興味を持ったきっかけのひとつが、他ならぬゴダイゴの音楽だった。ヴォーカルと作曲を担当していたタケカワユキヒデは当時東京外国語大学の英米語学科に在学中だったが、実はその頃まだ日本から一步も出たことがなかったという。この人に感化されて私も、外国には行かずに英語を習得しようと決心し、実際に初めて英国に行ったのはその決心ののち10年も経ってからのことだった。

『たのしい川べ』（1908）はスコットランド出身の童話作家ケネス・グレイラム（1859～1932）の代表作であり、グレイラムが幼年時代を過ごしたテムズ河畔の田園を舞台にモグラや川ネズミ、アナグマやヒキガエルらが繰り広げる物語である。原題は *The Wind in the Willows*、つまり『柳に吹く風』という。グレイラムがこれを書いた頃、すでに彼が育ったクッカム・ディーン周辺は宅地開発が進み、昔日の面影は失われ始めていた。グレイラムが表現しているのは伝統的な風景や生活様式、言い換えれば「過去とのつながり」の価値であり、この作品が書かれた当時はさまざまな意味で大きな変化の過渡期と言うべき時代だったのである。

さて、ゴダイゴのファーストアルバム『新創世記』（1976）は「If You Are Passing by That Way」（日本語タイトルは「思い出を君に託そう」というフォーク調の幻想的な美しい曲で始まる。英語のタイトルにあるとおり、「もし君がああ田舎道を通るなら、僕の願いを聞いてくれないか、見て来て欲しいんだ」（If you are passing by that way / That piece of countryside / Do me a favour, will ya? / And take a look for me）という歌詞が冒頭にあり、この部分が何度か繰り返される。この歌はこの後

「僕が幼い頃にぶら下がり遊んだ、あの古い柳の木が今でもそびえ立っているか、見て来て欲しい。その木は小川のほとりにあって、小川にはおたまじゃくしがいた。つかまえて大きくなるのを見ようと家に持ち帰ったら、結局死んでしまったんだ。」と続く。幼年時代を過ごした土地を離れて暮らすこの詩の語り手が、その辺りを通りすぎる可能性のある「君」という人物に、想い出深い柳の古木が無事かどうかを確かめて来て欲しい、と言っているのである。この曲は『青春の殺人者』の冒頭でも使われていた。

この曲を私は中学校時代に初めて聴いた。すでにゴダイゴが一世を風靡した後だった。歌詞の英語はそれほど難解ではないし、何よりもメロディとアレンジの美しさに衝撃を受け、繰り返し何度も聴き（当時はCDではなくLPだったので、摩耗による音質の劣化を避けるためカセットにコピーして聴いていた）、この曲に限らずこのアルバム全曲（およびこれに続く数枚のアルバムの曲も）の歌詞をほとんど暗記してしまい、ギターを弾きながら歌っているうちに英語の成績が飛躍的に向上してしまった。この頃ゴダイゴの音楽と出逢っていなかったら、おそらく私は英語教師にはなっていなかったと思う。

「想い出を君に託そう」の歌詞が何処の土地をイメージして書かれたのかを私は知らない。私は丘陵地帯の新興住宅街で育ったので、しかもその住宅街は年々拡大を続けていたので、丘や雑木林が宅地開発されて行く風景の変化を目の当たりにしていた。小川のほとりの柳の木ではなかったが、クワガタやカブトムシがいつもたくさんいるクヌギの木は何本か知っていた。そして、この曲を初めて聴いた当時、すでにそれらの木の何本かは姿を消し、その周辺も住宅地に変っていた。このような実体験の記憶も手伝って、中学生の拙い英語力でも「想い出を君に託そう」の歌詞に共感することが可能だったのかも知れない。おそらくこの歌詞の主人公は故郷を遠く離れた場所で重病を患い、柳の木を見に行くことが出来ないのであろうと、しかも自分の死期が近いことを自覚してい

るのであろうと、その当時の私は勝手に想像していた。

それから何年か経って、確か大学時代の終わり頃だったと思うが、『たのしい川べ』を読んだときに、ふと「想い出を君に託そう」が脳裏に蘇り、久しぶりにLPを出して来て聴いてみた。その頃ゴダイゴはすでに解散していた。中学校時代にこの曲を聴いていた頃には日本のどこかの風景を思い浮かべていたのだが、いつの間にかこの曲の風景が『たのしい川べ』を読みながら想像していたまだ見ぬイングランドの（とくにテムズ川のほとりの）風景にすり替わっていた。もちろんテムズ川は「小川」ではないし、歌詞の中の「小川」は原文では‘creek’であり、この語を「小川」の意味で使うのは実はアメリカ語法であり、英語の‘creek’は「湿地帯の河口」を意味するということを知ることになるが（このことはジョウン・ロビンソンの『想い出のマーニー』を読んで知った）、その当時は「川べの柳の木」というイメージだけで「想い出を君に託そう」の風景と『たのしい川べ』のそれとが私の中で一致してしまったのだ。

その後、忘れもしない1999年の秋、必要があってグレイアムの生涯について、いろいろな伝記などを読んで調べていた。偶然にもその頃、ゴダイゴは期間限定で再結成していて、そのコンサートの模様を衛星放送で見ることができた。残念なことに、このコンサートで「想い出を君に託そう」は演奏されなかった。と言うよりも私は、この曲をライブ演奏で聴いたことが一度もない。一方でグレイアムの伝記を読んで、エディンバラに生まれたこの作家が幼くして母親と死別し、父親はアルコール依存症でのちに失踪し、グレイアムは兄弟らとともにテムズ川のほとりの祖母の許で育てられ、経済的事情から大学進学を断念してロンドンのイングランド銀行に就職したという事実を知った。だがグレイアムはロンドンでの生活に馴染むことが出来ず、いつもクッカム・ディーンを恋しがっていたという。その頃彼は肺病を患い、また同じ頃に結婚したが夫婦仲は必ずしもうまく行か

なかった。このようなことを知ったとき、私の脳裏にはまた「思い出を君に託そう」が蘇ってきた。かつて想像していたように、自分の死を予期した病人が故郷を想うというイメージではなく、ロンドンで多忙で不幸な日々を送るグレイアムがクッカム・ディーンのテムズ河畔の柳の古木を案じているというイメージが、この詩とメロディから浮かび上がってきたのであった。

グレイアムはその後、クッカム・ディーンに邸宅を購入し、そこからロンドンに通勤するようになるが、この頃クッカム・ディーン界隈に昔の風景を見ることはすでにできなくなっていた。ほどなく彼は健康上の理由もあって銀行を退職し、専業作家となる。その直後に出版された『たのしい川べ』はこの作者にとって、テムズ河畔の失われた風景、すなわち自分の失われた幼年時代を永久保存する試みでもあったのだろう。「思い出を君に託そう」の歌詞が『たのしい川べ』やグレイアムの生涯を念頭に置いて書かれたのか否かは不明だが、この詩とこの童話、そしてこの作者の生涯は私の中で確かに共鳴している。



テムズ河畔の田園風景
(クッカム・ディーン付近)

『ギリシア・ローマ神話』と 現代（１） 花に変身した美少年たち

経営学部

山田 晶子

【はじめに】

今から4000年以上も前のこと、古代のギリシアではキリスト教とは異なった神々が信仰されていた。ギリシアがローマ帝国に征服されると、神々の名前は変わったがその性質はほとんど同じままで、信仰は受け継がれた。キリスト教が支配的になった西暦1世紀頃、この古代ギリシア・ローマの神々への信仰は廃れてしまったが、その神々の物語は『ギリシア・ローマ神話』として21世紀の今まで読み継がれ、世界各国で多くの言語に翻訳され、現代までの文明・文化へ計り知れない程の影響を与えてきた。西洋文明・文化を理解する上で、『ギリシア・ローマ神話』は必須の読み物であり知識の宝庫である。そしてもちろん、これらの物語は東洋・南米・アフリカ・極北への理解にも欠かせないものである。『ギリシア・ローマ神話』の集大成として有名な書物にオウィディウス（Ovid 43B.C.~A.D.17?）の『転身物語』（*Metamorphoses*）がある。筆者は学生時代にこの書物の翻訳と出会った。これが初めて邦訳出版された時に、英文学の授業で岩崎宗治先生（シェイクスピア研究の大家）が紹介してくださったので、早速購入して読みふけた（『ギリシア・ローマ神話』そのものは、子供のときから好きで読んでいたが）。素敵な挿絵も魅力的であった。題名が『転身物語』とあるように、『ギリシア・ローマ神話』では、登場する人間が、神々の罰や気まぐれあるいは憐れみからさまざまな植物・動物等の自